

課外授業

私が小学校時代を過ごした中国では、課外教育が盛んに行われていた。春は工場へ行って労働体験をし、夏は軍人の指導の下で、本物の機関銃（装弾していない）を担いで行軍訓練を受ける。秋は近郊の農村で、トウモロコシなどの収穫を手伝い、冬になると、寒さを凌ぎやすいようにと録映画を見に行ったり博物館を見学に行ったりという近場の屋内コースになる。

辛い肉体労働や行軍訓練よりは、私は博物館へ行くのが好きだった。戦争関連の展示が多い中、たまに人類進化に関する自然科学系のものもあつたりする。物が極端に不足していたためか、人類進化の展示と言っても、今でもたまに目にする猿が少しずつ直立していき、ついに人間になったという漫画風のイラストとほとんど同じスタンスで、絵とベニヤ板で作られた猿山から、少しずつ石を握って立ち上がった類人猿が野原に移るようなものだった。

ガラス越しに見て回り、一周すれば、順路先に映画館のような空間が現れる。そこで、一時間弱人類進化史の、アニメーションと記録映像半々の映画を見るのだった。その締めくくりは、周口店しゅうこうてんで発見された北京原人だ。我が民族の祖先がわかつたという、「課外授業の目的達成」的な終わ

楊逸

プロフィール
1964年中国ハルビン生まれ。
1987年に来日。2007年『ワンちゃん』（文芸界新人賞）で作家デビュー。
2008年『時が滲む朝』（文藝春秋）で芥川賞受賞。他に『金魚生活』『おいしい中国』『孔子さまへの進言』（以上文藝春秋）『すきやき』（新潮文庫）『だまり幻想曲』（講談社）『楊逸が読む『聊齋志異』』（明治書院）『獅子頭』（朝日新聞出版）。2013年6月『流転の魔女』（文藝春秋）刊行予定。

り方なのである。お陰で、人類の起源がもつと古い時代にまでさかのぼれるようになった今でも、私はまだ頑なに北京原人しがついてる。

恐竜展もあつた。もちろん恐竜の化石とかの展示がなく、絵とベニヤ板で作られた恐竜の擬似世界を「堪能」したあと、アニメーションと記録映像半々の映画を見るという人類進化の展示と同じパターンだった。

昨年の夏、トロントへ行った際、恐竜展をやっている知り、ロイヤル・オンタリオ博物館に行ってみた。大小様々な恐竜の骨組が、現代のスマートな照明に照らされた特製の台の上に展示されていた。大きな博物館だけあって、親子連れのほか、団体で来た小学生が目立っていた。——カナダの小学校にも、嘗て私が受けたような課外授業があるのだろうか。

自分で見て回る子や先生について説明を聞きながら進む子、小さな椅子に座って、スケッチに没頭する子もいた。好奇心の強い年頃だ。博物館で過ごしたこの時間と、得た知識、この子たちの将来にどんな影響をもたらすのだろうかと考えながら、ふと、自分ももういつでも博物館での課外授業を受けられるようになったことに気づき、心が躍り出した。

月刊 みんなぱく

4月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
課外授業
楊逸</p> <p>2 特集
だまし、だまされ</p> <p>2 誰があなたを一番だましているか 藤田 一郎</p> <p>4 ひとつはなぜだまされるのか
——切っても切れない社会と詐欺の関係 荻野 昌弘</p> <p>5 騙される人類学者 丹羽 典生</p> <p>6 見世物小屋の呼び込み口上
——舌先三寸でコマす 鶴岡 正樹</p> <p>8 世界のトリックスター、大集合！
小長谷 有紀／福岡 正太／須藤 健一
岸上 伸啓／宇田川 妙子／吉田 憲司</p> <p>10 似たモノさがし
だましの道具
久保 正敏</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
エチオピア初の私立博物館
——シェリフ・ハラール博物館
川瀬 慈</p> <p>16 多文化をあきなう
「商い」という作業
藤田 質子</p> <p>18 フィールドで考える
イラク・クルディスタンを訪ねて
吉岡 明子</p> <p>20 人間学のキーワード
人間学
丹羽 典生</p> <p>21 異聞逸聞
蚊帳か、帳か？
白川 千尋</p> <p>22 制服の世界、世界の制服
みんなぱくの制服
樫永 真佐夫</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|